

双葉町を追い続けて

堀切さとみ(『原発の町を追われて』制作者)

双葉町を追いかけようと決めた

二〇一一年三月十一日の大地震と、その後の福島原発の異常事態を伝える報道を、今も忘れることができない。

「恐れていたことが現実になってしまった」。三〇〇キロ離れた埼玉県に住む私でさえも、ものすごい焦燥感にかられた。私は二〇〇〇年の東海村臨界事故以降、原発がもたらすさまざまなことについて考えてきた。放射能があらゆる生命体に悪影響を及ぼすこと。安全に稼働させるために、多くの人に被爆労働を強いてきたこと。そして、地震大国日本のあるところに原発を立地させながらも、日本政府は事故を想定していないこと……

福島原発周辺の人たちはちゃんと避難しているのだろうか。そう思っていた矢先、さいたまスーパーアリーナに、福島原発周辺の市町村の人達が避難してきた。近くに住む私は、何が出来るかわからなのままその場に駆けつけた。そこには二千人を超える人達がいた。いくつかの自治体の中で双葉町は、四月以降は同じ埼玉県の加須市・騎西高校で避難生活を続けるという。故郷から遠く離れた埼玉県で、一時的避難ならまだしも、役場まで移して町ぐるみで避難生活を送るとは。原発立地の自治体がこのような選択をしたことが、私には意外であり、一縷の希望を見た気がした。双葉町を追いかけようと決めたのはこのときだったと思う。

避難所「騎西高校」の主人公は双葉町の住民

原発の町にくらす人たちは、多くを語りないだろうと思っていたが、聞いてみたいこと、話したいことは山ほどあった。騎西高校を訪れると、そこではいつでもイベントが行われていた。避難している人たちを元気付けようと、ボランティアや有名人が慰問に来ているのだった。間借りした宿に根無し草のようになっている人たち。ある女性が言った。「ここについても自分から何かをやるってことがない。自分も岩手や宮城に行つて、瓦礫撤去の手伝いがしたい」。私は心の中で「騎西高校の主役は双葉町、原発避難民のあなた達なんだよ」とつぶやいた。人は寝て食べられればいいのではない。自分で選び、自分で何かをやりたい存在なのだ。

騎西高校に通うにつれ、ここにいる人たちは「三食弁当を支給される避難民」である前に、それぞれ自力でたくさんものを積み上げてきた人達であることを知る。私は、原発賛成・反対で人を判断することに、さして意味はないのだと感じ始めていた。

住民集会までの道のり

「原発きたおかげで、出稼ぎしかなかった我々が、家族で暮らせるようになった」事故のせいでふるさとを追われてもなお、東電を責めることができないひとたち。こうした町民に対し、ついに東電は事故の謝罪に来ることはなかった。「いつまでこの避難所生活が続くのか」「いつになったら双葉町に戻るのか」こうした疑問に、国も東電も答えてはくれない。騎西高校での集団生活のストレスに耐えられず、周辺の借り上げ住宅に移ったり、福島県内に戻る町民も増えていた。

二〇一一年九月、ようやく東電社員が騎西高校を訪れたが、加害者の側からの一方的な賠償説明をするため、井戸川町長はこの賠償説明会を中止させた。

この頃、政府からは中間貯蔵施設を双葉郡に作るという話が浮上していたが、井戸川町長は「福島原発から出た放射能は『無主物(誰の責任でもないもの)』とされている。加害者責任をつやむやにしたまま、被害者である地元が引き受けるという前例をつくってはならない」と会議への出席を拒否していた。



こうした中、「おとなしい」と自称してきた双葉町民が、騎西高校ではじめて住民集会を開いたのは、二〇一一年一月のことだった。賠償金の問題が議題だ

ったが、町民はそれにとどまらず、さまざまな思いを言葉にした。また、事故前までは「安全神話を信じていた」という町民の中からも、埼玉に避難してから色々な情報を集めて学習を始める人も出てきていた。

政府の対応と双葉町住民、町長の苦悩

私はそうした町民の姿を、可能なかぎりビデオカメラにおさめた。ある町民に「町長にそれを見せたほうがいい」と促され、私は騎西高校の町長室で、はじめて井戸川町長と面会した。一市民が撮影したビデオを町長は食い入るように見てくれた。特に爆発の瞬間原発の中において、ちり紙に遺書を書いたという町民の話に絶句し、そして「町の大切な歴史を、避難してから残していなかったことを後悔していた。撮ってくれてありがとう」と言った。これを機に、何度か話を伺う機会をいただいた。

政府は双葉町に避難指示を出すだけで、どこにも避難場所を用意してくれるわけではなかった。四号機が爆発した時、逃げ遅れた四百人近い町民とともに町長は最後まで町に残っていた。相当量の放射能を浴びたはずだという。町民の健康を守るためには、放射能のリスクから少しでも離れなくてはという思いで埼玉に避難することを決めたのは、井戸川町長だった。

しかし、福島県は事故直後から山下俊一氏を招いて「年間二〇ミリシーベルトなら大丈夫」などの安全キャンペーンを行ない、その後は除染による帰還

政策をすすめた。放射能への不安を口にすることはタブーになっていく。こうした中、福島県内で避難生活をする双葉町民からは「なぜ役場を福島県外に出したのか」という声もあがっていた。「今まで恩恵受けたんだから、事故起こしたからって、ハイさようならとはならないべ」。あるいは、ふるさと双葉に戻れなくても、せめて福島県内になりたいという人達が、一年たってみると双葉町民の半数を超えていた。

原発と暮らした双葉町民の感情は一筋縄ではいかず、様々な利害や考えを持つすべての人達を町長は抱え込まなくてはならない立場にあった。

町長の辞任

長く続く避難生活の中で、復興も賠償も進まない中、町民ごおしのいさかきも表面化してきた。借り上げ住宅や仮設住宅は期限付きで生活費も自腹であるため、食費や光熱費が無償の騎西高校に対するやっかみの声もあった。さらには県外に飛び出した双葉町を、再び福島県内に戻そうとする働きかけが、双葉町議会の中から強まっていた。

しかし井戸川町長は、役場を福島に移すことには反対した。福島県内のいたるところが放射線管理区域に指定された数値であることを示し、チェルノブイリ基準に基づくなら町民を住まわせることは犯罪行為だと主張し続けた。二〇二二年一〇月には、シュネーブでの国連人権委員会にまで赴き、福島の惨状を訴えた。町議会は二〇二二年六月、九月と二

度にわたって、井戸川町長不信任案を出した。

そのときは反対する議員がいて可決されなかったが、役場を福島県いわき市に移転することは決まってしまうた。

そればかりか
一二月、今度は

井戸川町長が中間貯蔵施設の会議に出席しないことを理由に三度目の不信任案を出し、全員賛成で決させたのだった。国や東電にむけるべき怒りが、このような形で噴出してしまったことが、私は残念でならなかった。

その後町長は議会を解散したが、町議選告示前日の一月二十三日、辞職表明した。あまりに唐突な出来事のようにだが、役場移転が決まった頃から考えてはいたという。「今の福島県には住めない。そういう考えを持っていながら議会の圧力に屈服してしまっただけ。被ばくさせないようには町民を離したが、いわき市に移ることで崩れるのが納得できなかった」。それでもすぐに辞めなかったのは「非民主的な中間貯蔵施設の進め方を、体を張って止めたかったからだ」という。



町民の叫びを届けたい

二〇一一年二月に早々と収束宣言を出した野田前首相に、「われわれのことを国民だと思っただけです」と問い詰めた井戸川町長。本来なら事故の当事者が職を辞して反省すべきだが、一番の被害者である町の長が辞職することになってしまった。

事故から間もなく二年。史上最悪の原発事故であるにもかかわらず事故を最小化し、再稼働への動きも加速している中、私はこれからも双葉町を追い続けたいと思う。「福島だけでたくさんだ」という町民の叫びを、しかるべき人たちに届けなければと思っている。

二〇一三年二月八日、騎西高校では町長の退任式が行なわれた。多くの町民が泣きながら花束を手渡し握手をかわした。「泣かないでいいよ。今までよりいっそう身近になるんだから」。町長バッジをはずした井戸川さん。これからは双葉町のみならず、福島県内で自主避難を求める人たちとも手を携えていきたいという。

ドキュメンタリー『原発の町を追われて』

一月の金曜シネマで上映しました。二月には中津川でも上映会が行われました。是非見てほしい映画です。少人数の上映会でも行います。問い合わせは不戦ネット佐々木まで

★映画解説

福島第一原発のお膝元にあり、2012・3・11 直後、全世帯が避難勧告を受けた双葉町。事故から二週間後、町は役場機能を埼玉県加須市に移し、廃校になった高校（旧騎西高校）を拠点に避難生活を始めた。日本初の原発避難民。放射能から逃げるしかなかった人々。「俺たちはどうせ忘れられていくのさ」という避難民のつぶやき……。四月。騎西高校には双葉町民のおよそ二割にあたる 1400 人が避難生活を始めていた。東京では脱原発のデモが起こっていたが、原発と共に暮らした町民の心境は複雑だ。原発を信じてきたこと。何もかも失ったこと……。いつ帰れるかアテもない中で、避難民たちはそれぞれの思いを語りはじめた。毎日のように、ボランティアや有名人によるイベントが行われたが、避難してきた人たちは何もすることがない。そんな中、双葉町民は遠い埼玉の地でふるさとの盆踊りを再現させるが、不自由で先の見えない避難生活は変わらない。親子代々、東京電力で働いてきた田中さん一家は、爆発当時原発の中にいた息子のことを誇りに思っている。「今までずっと放射能を浴びてきたんだ」と言って、福島に戻っていった。その一方、望郷の念を捨て、騎西高校で書道教室を開く書道家もいた。去る人、残る人……。町民はそれぞれの一步を踏み出したかに見える。

11 月。ついに騎西高校で、町民自身が思いのたけをぶつけ合う集会を開いた。賠償も進まず帰還のメドもたたず、ほったらかしにされた人々は「このままでは、国と東電に殺される」とさげふ。自らも騎西高校に暮らす井戸川町長は、子ども達を守りたい一心で遠い埼玉に避難したと語るが、町民からは「福島にもどるべきだ」という声もあがる。故郷を亡くした喪失感と町の分断に直面してなお、前をみすえて生きる双葉町民の一年を、カメラにおさめた。